

タブー語の婉曲構造における一考察

—— 性表現の場合 ——

友岡 純子

要旨

性に関する表現のように、使用に際して忌避の心理を伴う言葉は婉曲化されることがほとんどである。特にほかの言葉になぞらえて表現する婉曲法は、換喩や隠喩による言い替えであり、比喩構造の中で生じる多義性が婉曲の機能を担っていると言えよう。さらに一般的な比喩と異なる点は、比喩構造そのものが時間の経過に伴い不断に変化することである。そのため、婉曲の循環とも言えるべき言語現象が起こるのである。本論は、このような婉曲のメカニズムを通時的な観点から、古典文学作品中の用例に即して明らかにしようと試みたものである。

<キーワード> タブー語の婉曲 性表現 比喩 多義性 婉曲の循環

1、はじめに

日本語にはタブーとされる言葉、即ち忌避の感情を伴う言葉がいくつかある。例えば「死ぬ」という言葉は、使う側にも受け取る側にも不吉な感じを与えるので、「なくなる」とか「あの世に旅立つ」とか言い換えられるし、「便所」という言葉は下品な感じを避けて「お手洗い」や「トイレ」と呼び換えられる。「病気」という代わりに「具合が悪い」といい、「売る」の代わりに「あげる」や「譲る」が使われることもある。そしてもちろん性に関する言葉、特に性行為を指す言葉はこのタブー性のもっとも強い言葉である。何をタブーとするかということは言語の話し手の価値観の問題であり、文化の問題であるが、タブーとした言葉をどのように婉曲化するかということは言語の問題である。

本論では、タブー語の中でも婉曲化される度合いが最も大きい、つまりタブー性が最も強い「性行為を表す言葉」（以下、「性表現」とする。）を取り上げ、それを手がかりにして日本語における婉曲の仕組みの一面について考察した。

2、性表現の婉曲法

現代語において、性表現を婉曲化するには四つの方法がある。一つ目は、あいまいな意味を持つ形式動詞や形式名詞などのあいまい語を使って文脈に依存しながら述べる方法である。「する」や「やる」は最も多く使われる語である。

二つ目は指示語を使って文脈や状況に依存しながら述べる方法である。「あれ」や「あっちの方」などは言い方によってはかなり独立して性的意味を持ち得る言葉となっている。

三つ目は外来語・外国語・新造語を使って卑猥な語感を中立化する方法である。現代最も多く使われている「セックス」「SEX」はこの方法であるし、「性交」などの漢語による造語も使われ始めた当初においてはこの方法によるものである。

四つ目は「寝る」「抱く」など性表現と類似または関連した意味の他の言葉（以下、「婉曲語」とする。）を使って述べる方法である。

前者の二つの方法は文脈や言語外の要素に依存するという点で消極的言語操作である。それに対して、後者の二つの方法は積極的に言語操作による婉曲化を図ったものである。一般的に修辞法としての婉曲法は後者の二つを指しているのだが、では、古代からの日本語では性はどのような言葉で婉曲化されてきたのであろうか。次に、古典文学作品の中から婉曲の実態を探ってみよう。

井原西鶴の『好色一代男』では、次のようにきわめてあいまいな性表現が用いられている。

a 一太夫寝ころびて十蔵を呼びて、しみじみとかたり懸け、帯ときて、とかせて、心よく物して、初めて首尾のしるしにと硯取りよせ、「十蔵様に身まかせ候、何か偽りあるべし」と、下帯に端書きして、むらさき筆と留めてわたし侍る。

（岩波日本古典文学大系 西鶴上 『好色一代男』P. 206）

この例に出てくる「物す」や「首尾」などはあいまい語による婉曲と考えられる。現代語で言えば「する」「やる」「完結」などの意味になるが、具体的な内容を限定しない語である。当然、前後の文脈から具体的な行為の内容は類推されることになる。しかし、文脈上性表現として用いられたとしても、「する」や「やる」のもともとの意味には全く影響はない。文脈が変われば全く異なった意味になるからである。「する」や「やる」は性行為を含むさまざまな行為を表す語彙の言わば上位語であって、文脈によって下位語の意味に限定されて理解されるのである。このようなあいまい語による婉曲としては「物す」や「首尾す」のほかに「いたす」「事すます」などをあげることができる。

文脈への依存度はあいまい語におけるより低い、それでもなお文脈にかなり依存して意味を限定する語に多義語がある。この多義語による婉曲も数多く見られる婉曲法である。

bーいさやまだかかる道をば知らぬかなあひてもあはで明かすものとは
(岩波古典大系本 『和泉式部日記』 P. 404)

この歌の「あひてもあはで」は「会っても構わないで」の意であって、「あふ」の多義性を利用した歌である。「あふ」には「出会う」「一致する」「調和する」「結婚する」「肉体的関係を結ぶ」などさまざまな意味がある。ただ「あふ」と言えば、それらのすべての意味を含んだ言葉として用いながら、文脈によって意味を限定するわけであるから、婉曲の方法としては、あいまい語による方法と同じと言ってもよい。違う点は、性行為の意味と他の意味との関係が、下位語・上位語の関係ではないということである。このような多義語による婉曲には、「あふ」のほかに「みる」「みゆ」「みあふ」「しる」「ぬ・さぬ・ゐぬ」「ちぎる」などをあげることができる。

しかし、これらの言葉がはじめから性行為の意味を含んだ多義語であったわけではない。もともとは性的意味合いのない言葉を婉曲語として比喩的に用いた結果、元の意味に新たな性行為の意味が付け加わり、多義語になったとも言えるのである。したがって、多義語による婉曲は、婉曲語による婉曲と考えられよう。

『古事記』から『好色一代男』まで、古代から近世に至る文学作品から取り上げた性表現の中で、多く見られた婉曲法は、上にあげたように、あいまい語によるものと婉曲語によるものである。このうち、文脈への依存度の高いあいまい語による婉曲は除き、ここでは、積極的言語操作としての婉曲語による婉曲について考察を進めることとする。

3、婉曲語のメカニズム

婉曲語のもう一つの例として「ちぎる」がある。「ちぎる」は『古事記』や『日本書紀』においては「誓う、約束する」という意味の語であり、性表現ではなかった。しかし、12世紀初め頃成立したとみられる『今昔物語集』においては性表現としての「ちぎる」が見られる。次の例は10巻32話の一節である。

cー一人ノ男出来テ其ノ女ニ睦レテ二人臥シヌ。興キ上リテ男ノ云ク「極

テ熱シ。汗漱カム」ト云テ、河ニ下テ水ヲ浴テ上テ亦、女ト吉ク契ル。
——（中略）—— 一人ノ男来テ夫妻ト可成ベキ契ヲ語テ、二人臥シ
テ後ニ……………（岩波古典大系本『今昔物語集二』P. 323）

この例には二ヵ所に「契」があるが、前者はまさに「性行為」を指し、後者は「約束」を指している。「ちぎり・ちぎる」はここでは既に性表現として理解されていたようである。

d-穴をのぞける親をもちけり

ちぎる夜をおとなげなくもさまたげて

（『新撰犬筑波集』 鈴木棠三校注 角川文庫P. 56）

『犬筑波集』の中の一節である。夫婦の契りを結んでいるところを何となく邪魔したくなった僻み者の親の句であるが、この句の「ちぎる」の意味は実にはっきりしている。つまり、「ちぎる」は近世初頭においては性表現なのである。

古代において性的意味を持たなかった語が、中世から近世にかけて性的意味を持つようになったという事実から、「ちぎる」が性の婉曲語として用いられるようになった転換点は中古であることが推測される。実際、中古の王朝物語には男女の関係を「ちぎり」「ちぎる」で表現したものが多い。しかし、これらの「ちぎる」には明確な性表現と断定できるものがほとんどなく、仏教的な宿世の意味で用いられたものを除けば、多くは、愛の誓いや約束に基づく男女の関係をあいまいに指しているか、または約束そのものを意味しているのである。

先にあげた婉曲語のうち、「あふ」（逢う）、「ぬ」（寝る）などは現代語においても性的な意味を持って用いられているので、婉曲語となる必然性も十分理解できよう。しかし、「約束する」という意味の「ちぎる」や視覚動詞の「見る」がなぜ性行為を表す婉曲語として用いられたのかは、少なくとも現代人の感覚からは、にわかには理解しがたいであろう。このように、一見性行為とは縁のないような意味の言葉がなぜ性表現となるのであろうか。次に「ちぎる」を例に用いてこの問題を婉曲のメカニズムの観点から考えてみよう。

婉曲語による婉曲とは、タブーである性行為を表すのに、性的意味を持たない別の意味の語を用いる婉曲の方法である。別の事柄になぞらえて言うわけであるから、比喩の一種とも言うことができよう。もともと性的意味合いのない言葉で

あったものが、婉曲化する意図を持って比喩的に用いられたために、性表現として定着した言葉である。比喩というものは、本来Aという事象をaと表現すべきなのに、ある意図の元にbと表現することであって、そこにはaからbへの意味のずれが生ずる。しかし、比喩が成立するためには、表現されるべき事象と表現との間に類推が成立しなければならない。つまり、aからAを類推できるように、bからもAを類推できなければならないのである。性表現で言えば、「ちぎる」という言葉を聞いたとき「性行為」のことだと理解できなければ比喩にはならないのである。

たとえられる事象と比喩との間の類推を成立させるべきつながりには、二種類のつながり方がある。一つは、もともとaとbとが近接性をもっている場合である。例えば、「寝る」や「抱く」は性行為に至る一連の行為として時間的に隣接、または近接している行為であるが、それでは「ちぎる」はどうであろうか。中古の物語の中では、男も女も実によくちぎり合う。隔てなしに直接会うことが即結婚を意味した時代にあっては、男はまず己の愛情を誓うこと以外に女に誠実を示す方法はない。また、愛が成就した暁には、またの逢瀬を約束して男は帰らねばならない。通い婚が残っていた時代の「契り」は現代における「約束」や「誓い」とは比較にならないほどの重さを持っていたのである。

このように考えてくると、「ちぎる」と「性行為」は現代人が考えるほどかけ離れた関係にあるのではなく、案外近接性を持っていたことが明らかになる。

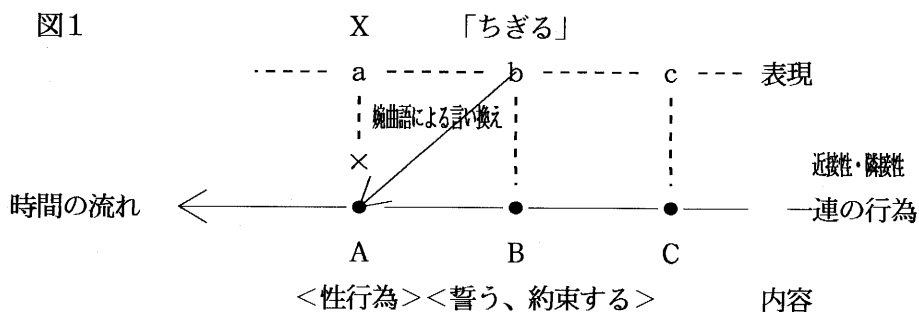


図1は「ちぎる」を用いた婉曲の仕組みを図示したものである。性行為（A）は本来、原・性表現X（確定できないので仮にX）によって表現されるはずであるが、あからさまに表現したくないという心理が働いて、「ちぎる」（b）とい

う言葉で表現される。図で言えば、aから出た線は、婉曲化されてAにはつながらないが、一方でbから出た線はAを指し示す矢印となっている。つまり、矢印b Aは「ちぎる」という婉曲語による言い替えを示しているのである。ところで、「ちぎる」はもともと「誓う、約束する」という意味を持った言葉であったのだが、その意味が消えてしまったわけではない。したがって、bとBをつなぐ線はつながっており、「ちぎる」はこの時点では多義語となっている。比喻としての婉曲語が本質的に多義語であるということは注目に値することである。

このように近接性や隣接性に依拠して言い換える比喻を換喩と言うが、性表現の婉曲化もこの換喩のシステムで行われると考えることができよう。ただし、換喩の機能については山梨正明の以下の説明によるものとする。

eー換喩の基本的な機能は、あるものをそれに関係した別のものによって表していく点にある。この機能は、空間的な隣接性、近接性、共存性や時間的な前後関係、因果関係によって特徴づけられる。この場合、表現の対象とされるものとこれを表現するものは、かならずしも質的にみておなじ対象の一部という関係にはない。また、表現される一方が、これを表現するもう一つの対象に均一的に部分・全体の関係でふくまれるわけではない。

(『比喻と理解』1988 東大出版会 P. 93)

「ちぎる」のような換喩を用いた性表現のほかに、次の例のような性表現もある。

fー北「コレコレ明松を買はねへか。ここの名物だ

彌「べらぼうめ。もう日の出る時分。明松がナニいるものか

北「夜があけてもいいはな。おめへかつてとぼせばいい。ゆうべのかわりに(●友岡注…前夜「彌」は遊女を買って待っていたのに、「北」の策略で女は来なかった。その事を「北」がほのめかして言う。)

彌「おきやアがれ

(『東海道中膝栗毛』十返舎一九 享和2年=1802——江戸文学叢書10巻)

「ともす」または「とぼす」は「点す」と書いて、性行為を表す性表現として近世に用いられた語である。近松の作品にも見られるので、元禄頃には既に性的意味を持っていたものと思われる。

もう一つのつながり方というのは、この「ともす」のように、たとえられる事象と比喻との間に近接性も隣接性もない場合である。つまり、「ともす」という言葉は本来「火をつける・明かりをつける」という意味であって性行為とは全く関わりのない言葉である。この「ともす」が性行為の比喻として理解されるためには、「ともす」という行為と性行為との間に、類似性がなければならない。しかも、この類似性は多分に相対的なものであって、社会的に認知されなければ一般的に用いられる比喻とはなりえないものである。「ともす」が始め遊里における隠語として用いられやがて流行語となったということは、この類似性が社会的に認知される過程であったと考えることができよう。そしてさらに、「ともす」が隠語として誕生する以前に、「こひ（火）のおもひ（火）＝恋の思い」のように恋愛感情と燃える火の間の類似性が伝統文化として人々に受け入れられていたからこそ、「ともす」が性行為を意味する比喻として理解されたのである。

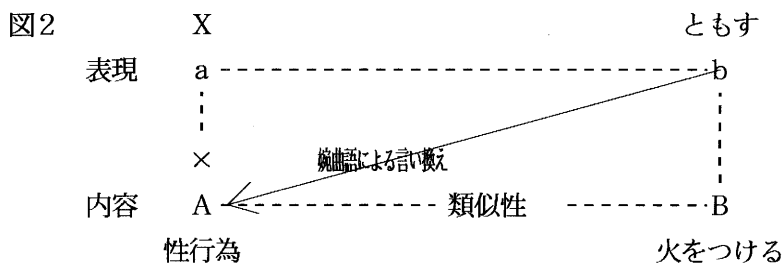


図2は婉曲語「ともす」による婉曲を図示したものである。構造は図1とはほぼ同じであるが、異なっている点は、行為Aすなわち性行為と、行為Bすなわち火をつけることとの間に近接性がないということである。しかし、AとBとの間が線で結ばれて、三角形A B bができなければ、婉曲は成立しない。このAとBとをむすぶものこそ、伝統的文学によってはぐくまれた類似性の共通認識である。

このような類似性に依拠した比喻を隠語と言うが、性表現の婉曲は換喩と同様隠喩のシステムによっても行われるのである。

このように見てくると、性表現の婉曲の本質は比喻であって、中でも換喩と隠喩を用いた言い換えによる婉曲語が果たす役割は大きいと言えよう。婉曲語は、比喻という「意味のずれ」を利用してタブー語使用を回避する言葉なのである。

4、婉曲表現における意味の多重性

婉曲表現の最大の特徴は、意味の多重性ということであろう。はっきりとは言

われないが前後の文脈から何となくそれと分かるようにするためには、多義語を用いればよいわけである。比喻を用いた婉曲語の成立も、この多義性の獲得のためといっても過言ではない。例えば、「ちぎる」という言葉で性行為を表したとき、「ちぎる」は「約束」や「誓い」「男女の関係」や果ては「宿命」と言った様々な意味を内包した語として用いられる。性表現であると思って読めばそのように読めるが、性的な意味合いを読み取らなくてもそれはそれで意味を成すと言うのが婉曲表現なのである。

しかし、この婉曲表現の基本的な性格が災いして、性的意味合いを読み取ることができなくなることもある。特に長い年月を経たり、性に対する人々の意識が大きく変わってしまったらすれば、上手に隠された性表現は見落とされることとなる。意識して読み取ろうとすれば「穿ちすぎ」との批判も受けようが、意識して読まなければ読み取れないのが性の婉曲表現なのである。

ところで、一つが多義語が性の婉曲語として用いられるとき、いくつかある意味のうち、性的な意味が文脈によって限定されて一つだけ選択されると考えるのは間違いであろう。例えば、次の歌の「ちぎり」という婉曲語の意味を考えよう。

g 一正平十八年内裏にて人々題をさぐりて百首歌読み侍りける時

寄遊女恋

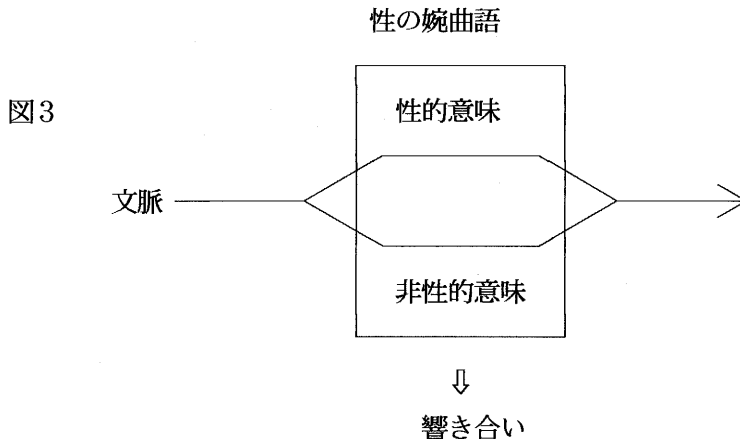
妙光寺内大臣

いかにしてむすびさだめん波枕うきたる舟のよるの契を

(『新葉集』 新編国歌大観883)

この歌の「ちぎり」は舟の中で遊女が客の男と交わす一夜の交わりを意味しているが、単に性行為という行為そのものだけを意味しているのではない。「ちぎり」という言葉には「愛の誓い・約束」や「宿命」という別の意味が内包されていて、性行為を意味するときですら、その底にある意味が透けてみえるのである。遊女の恋はただ一夜の不安定な恋であり、愛の誓いも約束も一夜限りのはかない恋なのだ。そしてそんな契りを結ぶ身を逃れられぬ宿命として、遊女は一夜の恋に燃えるのである。

次の図で示すように、婉曲語は、婉曲語であるがゆえに、性的意味と非性的意味を両方内包していなければならない。そして性的意味と非性的意味は、文脈によってそのどちらかに限定されたとしても、互いに響き合うのである。



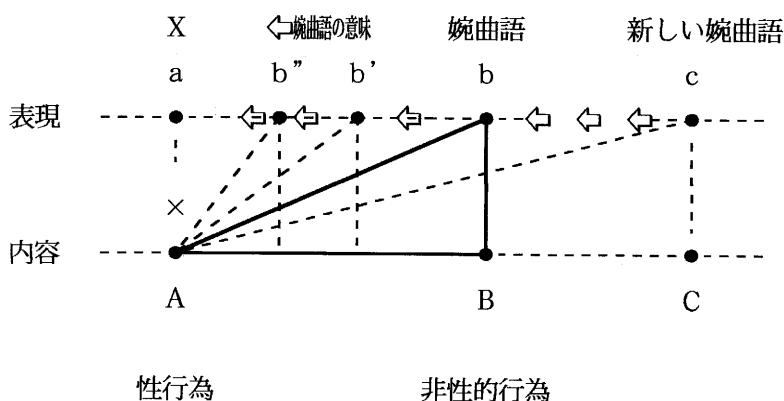
性の婉曲語は意味と意味との微妙なバランスの上に立っているので、性的にも非性的にも響く意味のハーモニーを持っているといってもよい。和歌における序詞や懸詞、或いは本歌取りなどの技法と共通する言葉のハーモニーである。

5、性表現の婉曲における意味変化の構造

タブー語は、その語に対する忌避感情が強ければ強いほど激しい意味変化を伴うものである。例えば、「便所」という言葉を避けて「お手洗い」という婉曲語が生まれるが、「お手洗い＝便所」という意味が定着してしまえば、今度は「お手洗い」そのものが忌避される対象となる。このように次から次に新しい婉曲語が生まれ、そしてやがて死語となって消えていくという過程をたどるわけである。このことを裏返せば、一つの語、例えば「お手洗い」が「手を洗うこと⇒便所」という意味変化の過程をたどるということになる。

こうした論理から行けば、日本語において全く婉曲化されないあからさまな性表現Xがあって、その語を忌避するために婉曲語が次々に生まれたということになろう。そのX、またはXに近い語は何であったのだろうかという疑問は残るが、日本語においては性表現は婉曲化されるのが普通であれば、Xは特定できないということになろう。性表現は、性的意味と非性的意味のバランスの上に立っている所以、どちらかの意味が強くなってバランスが崩れれば、婉曲語として存在できない。性的意味だけになって固定化してしまえば、死語となってしまうが、非性的意味だけになれば、一般語彙として生き長らえることができるのである。そして、この意味変化を起こす力は主として人間の心理的圧力なのである。

図4



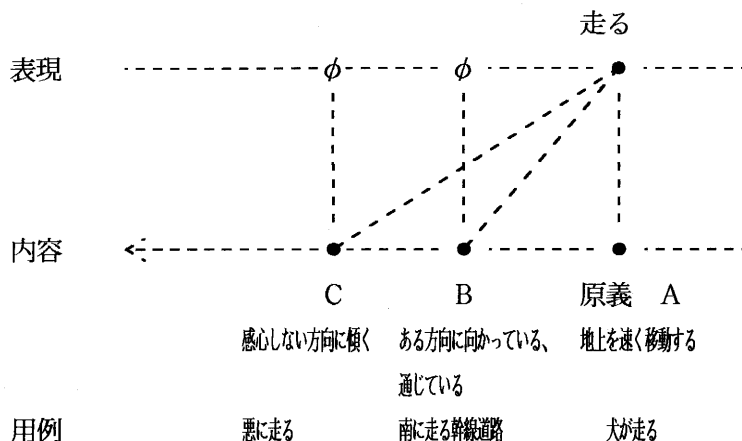
上の図は、図1、図2で示した婉曲語の仕組みと同じ図であるが、婉曲語として多義性を持つ三角形A B bは、実は時間の経過と共に常に変化する存在である、と言わねばならない。婉曲語bは使用の定着と共に性表現としての意味を強めていく。つまり、bはaに限り無く近づいていき、やがてaに重なってしまうであろうと思われる。多義性を失って性表現になってしまうということである。そうなれば、又新たな婉曲語が必要となる。上の図で言えば、三角形A C cの誕生である。

古代から近世に至るまで、さまざまな性の婉曲語が次々と誕生してきた。それはすなわち、日本語における性は固定した性表現であからさまに語られることを忌避するということの意味している。この忌避の感情が、心理的圧力となって、 $\{b = B\} \Rightarrow \{b = A, B\} \Rightarrow \{b = A\}$ という意味変化を起こすのである。bがaの位置に来て固定化してしまえば、もはやb = A, Bという婉曲語の構造は成り立たない。これが意味変化のシステムである。

性表現の婉曲語に限らず、言葉の意味は変化する。一つの語が時間の経過とともに転義され、多義語となることは多くの言語にとって必然であり、その転義が比喩というシステムを用いることも周知の事実である。しかし、性表現という特殊なタブー語を取り上げ、その婉曲語の意味変化を具体的な言葉に即して考察してみると、性表現の婉曲語にとっては、この原義と転義との距離が問題であるということが分かる。BとAとの間の距離が短すぎれば婉曲の効果は上がらないし、

遠すぎれば性表現としての意味は持ちえない。一般語彙の場合は、例えば次にあげた「走る」の場合のように、比喻義として成立するための近接性や類似性さえあれば、A BまたはA C間の距離は問題にはならない。原義Aから転義BやCが生まれ、多義語となっている様子が下の図である。

図5



こうした一般語彙の場合と性表現の場合とで決定的に異なる点は、性表現の婉曲語bはもともと原義Bに対応する言葉であっても、Aという性的意味を与えられると、原義が薄れていき、やがてAという性表現に対応する言葉になってしまうという対応関係自体の変化にある。タブー語の忌避という心理的圧力により、次々と新たな語を取り込んで意味変化を引き起こす言語現象が、リアルタイムで観察できる点で、性表現の婉曲は興味深い現象であると言える。

6、おわりに

性表現は、忌避という人間の心理によって、特定のメカニズムのもとに次々と生まれてくる言葉である。したがって、これらの言葉をばらばらに分析し、個々の語の意味を吟味してもその本質は明らかにならないであろうと思われる。婉曲化という言語現象の中で捉えてこそ一つ一つの語の意味も明らかになるのである。従来の国語学、国文学の研究においては、このような視点から性表現を捉えようとするものはほとんどなかった。しかし、それぞれの時代、それぞれの作品の中だけで語の意味を考えることにはおのずから限界がある。

本論は、時代を越え作品を越えて、性表現を総体として捉えながら婉曲のシス

テムを明らかにしてきたが、性表現の場合だけに限定されたものである。今後は性表現以外に、死に関する表現などにも対象を拡大して考察していくつもりである。

<参考文献>

- 1、渡辺友左 1982 『日本語と性』 南雲堂
- 2、大野晋 1974 『日本語をさかのぼる』 岩波新書 岩波書店
- 3、キトレッジ・チェリー 1990 『日本語は女をどう表現してきたか』
福武書店
- 4、中村明 1991 『日本語レトリックの体系』 岩波書店
- 5、平賀正子 1993 「品物としての女——メタファーにみられる女性
観」 『日本語学』臨時増刊号明治書院
- 6、楠見孝 1987 「比喩表現の理解過程」 『表現研究』46号
表現学会
- 7、赤羽研三 1985 「デリダの隠喩論について」 『表現研究』42号、
- 8、半澤幹一 1987 「ことばの記号性と表現性」 『表現研究』46号、
- 9、半澤幹一 1985 「喩像論粗描」 『表現研究』42号
- 10、半澤幹一 1993 「古代歌謡の火喩」 『表現研究』57号
- 11、金岡孝 1979 「比喩について」 『論集日本語研究8』 有精堂
- 12、山梨正明 1988 『比喩と理解』 東大出版会
- 13、山梨正明 1992 『推論と照応』 くろしお出版
- 14、外山滋比古 1968 『修辭的残像』 みすず書房
- 15、佐藤信夫 1992 『レトリック感覚』 講談社学術文庫 講談社
- 16、佐藤信夫 1993 『レトリックの記号論』 講談社学術文庫 講談社、
- 17 佐藤信夫 1986 『意味の弾性』 岩波書店
- 18、ピエール・ギロー 1978 『言語と性』 訳本 1982 白水社
- 19、ジョージ・レイコフ 1987 『認知意味論』 訳本 1993
紀伊國屋書店
- 20、ステファン・ウルマン 1962 『言語と意味』 訳本 1969
大修館

(お茶の水女子大学人間文化研究科比較文化学専攻1年)